

栄花物語における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿⁽¹⁾を受け、栄花物語を研究資料として、それにおける希望表現⁽²⁾の実態を説明しようとするものである。

『日本古典文学大事典』⁽³⁾によると、栄花物語は文学史上は歴史物語というジャンルで扱われるが、六国史に連なる編年体風歴史書と見ることもできる。その内容は藤原道長の栄花を描くことが中心であり、後の説話集に断片的に引用されるものがしばしば見られる。構成は全四十巻からなり、前三十巻を正編、後十巻を続編と分け、正編の作者としては赤染衛門（天曆十年頃から長久二年以後）が有力であるが、確定はできない。続編の編者は、出羽弁や周防内侍の名があげられるが、これも確定ではなく、むしろ複数の者が書き継いでできたものが現在の形で残

されたと考えるのが妥当であろう。文体はこれまで扱った説話集と異なり、平仮名書きの和文体の文章である。

テキストには、松村博司・山中裕校注『栄花物語』（岩波書店日本古典文学大系75 昭和四二年四月第二刷発行）を用いる。その底本の梅沢本（旧三条西家本）は、四十巻十七帖よりなる、栄花物語写本中最古の完本であり、書写年代は鎌倉中期を下らないものである。翻刻に際して、底本にある仮名に多くの漢字を当てたが、この場合、底本の仮名はそのまま振り仮名として残した。また、元来底本の漢字に施されている片仮名または平仮名には（レ）を付した。他本を参照し、底本に字句を補った場合には（レ）を付し、底本の字句を改めた場合には*符を付し、会話・心話の部分に「レ」を付けた。

二、希望表現の構成形式

栄花物語（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

〔欲〕

（二例）

「ソント思フ」	(七八例)
「ソントス」	(二四例)
「願」	(三八例)
「願フ」	(四例)
「願クハ」	(二例)
「給ヘ」	(六例)
「望ム」	(二三例)
「祈ル」	(一三七例)
「請フ」	(一例)
「乞フ」	(一例)
「求ム」	(一二例)
「ホシ」	(二〇例)
「マホシ」	(七六例)
「バヤ」	(四一例)
「ガナ」	(二六例)
「ナン」	(二九例)

全体の分量とも関連して、本書における希望表現の構成形式は多様に亘り、また、その代表的な形式の用例数が多く見られる。具体的に見れば、「欲」「願」といった名詞形式、「ソント思フ」「願クハ」といった慣用形式、「望ム」「祈ル」といった希望を表す動詞形式、「マホシ」「バヤ」「ガナ」「ナン」といった希望を表す助動詞と終助詞形式が使用される。名詞形式には「願」が多く、慣用形式には「ソント思フ」が多く、動詞形式には「祈ル」が多く、和文の助動詞と終助詞には「マホシ」と「バヤ」が多用される。ここに、本書における希望表現の中心的な形式は和文の助動詞と終助詞であり、これらのことが本書の内容と文体とに關係することが見てとれる。

三、各形式の用法

1、「欲」「ソムト思フ」「ソムトス」の用法

まず、「欲」の用法を見る。本書に「欲」は二例見られ、そのうち名詞用法と助動詞用法が一例ずつである。

(1) 諸行無常は天上に上る智慧(の)^{ワビ}橋なり、是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり、(卷第三十 下三三〇頁)

例(1)における「愛欲」は仏教用語であり、煩惱と同じ意味の名詞用法である。

(2) 尼君^{ニ君}「若人欲^欲了知、三世一切佛、應當^{應當}如是觀、心造諸如來」とうち誦^誦じてまかでぬ。(卷第十八 下八九頁)

例(2)は華嚴經からの引用である。「欲」は漢文における助動的詞用法であり、このまま音読されたであろうが、「もし人が了知したいならば」の意と解され、希望表現の下位分類では「願望」⁽⁴⁾を「説明」⁽⁵⁾する用法である。

次に、「ソント思フ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「ソント思フ」は七八例見られる。

(3) 所有の色には、普^{あまね}く一切衆生を利益^{りやく}せんとおぼしたり。

(卷第二十二 下二四八頁)

(4) 后た、せ給べけれど、隙なき事をいかゞとおぼしめされて、后を院になし奉らんとおぼしめす。(巻第三十九 下五一〇頁)

例(3) (4)は地の文にある用例であり、文末で言い切りの形で、「あらゆる衆生を利益したいとお思ひになった。」「后を女院にお上げしたいとお思ひになる。」の意と解され、いずれも三人称の「願望」を「説明」する用法である。

(5) 植木静ならんと思へども、風やます。子孝せんと思へども、親待たず。(巻第十五 上四五七頁)

(6) 宣ふ様は、「長谷、堂建てんと思ふに、北に當りたればいと恐しければ、かの寺に年内に行きて、四十五日そこにて過して、來年の二月ばかりなん京に出づべき」などいふ事をの給はせつ、(巻第二十七 下二五二頁)

例(5)の原典は孔子家語にある「樹欲静而風不止、子欲養而親不待」であり、ここは往生要集に「樹欲静而風不_レ停、子欲_レ養而親不_レ待」とあるによる読み下し文である。その「〜んと思へども」は明らかに原漢文の「欲」に対応する訓読であり、この点において例(2)の「欲」と同様である。意味としては、擬人法の「植木が静にたくても」、「子が親孝行したくても」の意と解され、従属節で「願望」を「説明」する用法である。例(6)は会話文にある用例であり、「長谷に堂を立てたいと思つたが、」の意と解され、これも従属節で「願望」を「説明」する用法である。

(7) 尋ねんと思ふ心もいにしへの春にはあらぬ心地こそすれ

(巻第三十一 下三四九頁)

(8) 今はこの御堂の邊りの木草ともならんと思へる人多かり。(巻第十五 上四四七頁)

例(7)は和歌の、例(8)は地の文にある用例であり、「花を尋ねたいと思ふ心も」「木草にでもなりたい人が」の意と解され、いずれも連体修飾節で「願望」を「説明」する用法である。

(9) 「率て出で奉る折などは、后になし奉りて、御輿にて出し入れ奉りて見奉らんとこそ思ひしか、かくやは」と伏しまろび泣かせ給。

(巻第一 上九七頁)

(10) 「いと安からぬ事におぼえて、みづから聞えんとはかり思しに、いとをしうこの君のかくおどろくしう物し給へば、いと心苦しきになんかくも聞ゆる」との給はするに、(巻第十二 上三七〇頁)

例(9) (10)は会話文にある用例であり、「〜んと」と「思ふ」の間に副助詞・係助詞の「ばかり」「こそ」が挿入され、「御輿で宮中を出入するような身分におさせたいと思つたが、」「私からお話し申し上げたいと思つているうちに、」の意と解され、これらも「願望」を「説明」する用法である。

次に、「〜ントス」の用法を見る。周知のように、「〜ントス」はもともと希望表現より「将然」を表すのが基本であるが、そのうちいわゆる有情物の「将然」は希望表現と関連性が強い。本書にこのような希望表現と関連する「〜ントス」は二四例認められる。

(11) 「まづ近き國々、南殿・清涼殿などは、皆四月棟上げんとす。公

事はことなるものなりけり」と見あさみ思ふべし。

(卷第十一 上三五五頁)

- (12) 「今度参りてせん」とす。よく學問をすべし」といひ勵ませ給ふ程も、佛の御方便に似させ給へり。(卷第十五 上四五四頁)

例(11) (12)は、「近国の国司の受持や紫宸殿・清凉殿などは、皆月に棟上げをしようとしている。」「今度参つて論議しようと思う。」の意と解され、いずれも意志をもった希望表現と関連性があるものである。

2、「願」「願フ」「願クハ」「給へ」の用法

まず、名詞「願」の用法を見る。本書に「願」は三八例見られ、すべて佛教用語である。

- (13) 「この度生きたるは異事ならず、我願の叶ふべきなり」と宣はせて、異事なくたゞ御堂におはします。(卷第十五 上四四六頁)

- (14) そこら充ちたる僧俗上下、知るも知らぬもなく、願を立て額をつきの、しる。(卷第二十六 下二二三頁)

例(13) (14)は「自分の願が実現するはずである。」「知っている人も知らない人も区別なく、願を立ててぬかづいて大声で祈る。」の意と解され、「願」の名詞用法である。また、「御願」「大願」「結願」「咒願」「願書」「願文」などの複合名詞形も見られるが、いずれも仏教用語であり、儀式的な「祈祷」の意を伴う名詞用法である。この点について後述する動詞「願フ」の連用形名詞法の「願ヒ」とは異なる。

次に、「願フ」の用法を見る。本書に「願フ」は四例見られ、そのうち実動詞用法が二例、連用形名詞法が二例見られる。

- (15) 諸人の願ふ心の近江なる安良の里の安らけくして
(卷第十 上三三一頁)

- (16) 此娑婆世界は願ひ住むべき所にもあらず。
(卷第三十 下三三〇頁)

- (17) 「今はこの世の祈なせそ。年頃の願ひは都率天の内院なり。」
(卷第三十六 下四三二頁)

例(15)は和歌にある用例であり、「願う」は連体修飾語として用いられる。例(16)における「願ひ住む」は複合動詞の用法である。例(17)における「願ひ」は連用形名詞法の用法であり、この連用形名詞法は広く「願うこと」を表し、仏教用語の儀式的な名詞「願」と意味的に差がある。

次に、「願クハ」「願フ」の用法を見る。本書に読み下し文の例と原漢文の例と一例ずつ見られる。

- (18) 「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもて、かへして當來世に讀佛乘の因、轉法輪の縁とせん」など、誦し給ふも尊く面白し。
(卷第十五 上四五〇頁)

- (19) 「願我生々盡未來、常得值遇法華經、爲諸衆生開演說、引攝西方安樂刹」とうち拜み奉りて、(卷第十八 下九五頁)

例(18)は白氏文集、和漢朗詠集からの引用であり、「願はくはくん」の形で、「今生において世俗の詩文を作り、狂言綺語を弄した罪を犯して、願わくはこれを転じて、後世永遠に仏法を賛嘆し、説法するものとなるべき因縁としたい。」の意と解され、「願望」を直接「表出」⁶⁾する用法である。例(19)は出典未詳の原漢文体の偈文であり、「願わくは私がいづれでも法花経に出逢い、衆生のために開演し、西方の安樂へ導きたい。」の意と解され、これも「願望」を直接「表出」する用法である。

次に、「給へ」の用法を見る。一般的に「給へ」は命令表現に属するが、神仏や目上に対して用いられる場合、命令表現でなく「祈り」「願う」という意の希望表現と見なした方が妥当であろう。本書に希望表現と認められる「給へ」は六例ある。

(20) 大納言殿は、「年頃頼み奉りつる不動尊・仁王經助け給へ」と、額をつき惑ひ給ふ。(巻第十六 下三七頁)

(21) 我はたゞ佛の御前におはしまして、「たすけ給へ」と額をつかせ給ふ。(巻第二十一 下一四〇頁)

例(20) (21) は会話文にある用例である。「年頃頼りする不動尊、仁王経よ、どうか助けていただきたい。」「ご加護を垂れていただきたい。」の意と解され、いずれも神仏に対する祈りであり、「希求」⁷⁾を直接「表出」する用法である。

3、「望ム」「祈ル」「請フ」「乞フ」「求ム」の用法

まず、「望ム」の用法を見る。本書に「望ム」は一三例あり、そのうち

栄花物語における希望表現について

実動詞用法が一例、連用形名詞法が二例見られ、「所望」のような熟語用法は見られない。

(22) 「世の中にはかくこそ有けれ。『望めど望まれず、逃るれど逃れず』といふは、げに人の御幸にこそ」と、聞にくきまで世にの、しり申。(巻第五 上一八九頁)

(23) 宮司・帶刀などは、我もくと望み申せど、大殿選びなさせ給ひつ。(巻第十三 上四〇〇頁)

(24) 次々の宮司、さきぐのやうに競ひ望む人多かるべし、今は古體の事なれど。(巻第十四 上四二八頁)

例(22)における「望め」「望まれ」は単独使用の形であり、例(23)(24)における「望み申せ」「競ひ望む」は複合動詞の形であるが、いずれも動作行為を表す実動詞用法である。

(25) 「十方佛土の中には、西方をもて望みとす。九品蓮臺の間には、下品といふとも足むぬべし」といふ事を、常よりも耳とまりて、(巻第十八 下九二頁)

(26) 九品の御望こそ深くはおほしめさるべけれ。殿、大納言、五節出させ給。(巻第三十六 下四五六頁)

例(25)(26)における「望み」はいずれも極楽浄土に生まれ変わる「希望」の意を表す名詞用法である。

次に、「祈ル」の用法を見る。本書に「祈ル」は一三七例あり、そのうち実動詞用法「祈ル」が三五例、動詞連用形名詞法「祈リ」が一〇二例見られる。

(27) 大將殿いみじき事におほし祈らせ給ふ。(巻第四 上一四〇頁)

(28) 且は頼み仕うまつり給ふ皇太后宮、竝に(品)宮の御息災を祈り奉り、(巻第十六 下四六頁)

(29) おほつかな今日は子の日を山菅のひきたがへても祈りつるかな

(巻第三十一 下三五八頁)

例(27) (28) (29)における「祈らせ給ふ」「祈り奉り」「祈りつる」はいずれも実動詞用法である。

(30) 中宮月頃御心地怪しう惱しうおほしめされて、よろづ宮司も、また公よりも、御祈の事さまぐにいみじけれど、六月二日うせさせ給ぬ。(巻第二 上 七八頁)

(31) その方の心のどかにおはしますも、限なき御祈の験なるべし。

(巻第八 上二八四頁)

(32) あふまでとせめて命のをしければ戀こそ人のいのりたりけれ

(巻第三十二 下三八一頁)

例(30) (31) (32)における「祈の事」「祈の験」「人のいのり」はいずれも「祈ル」の連用形名詞法である。

次に、「請フ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「請フ」は一例見られる。

(33) 神佛にも『己がある折、先にたて給へ』と、祈り請はざりつらんと思ふが悔しき事。(巻第八 上二八九頁)

例(33)における「祈り請ふ」は複合動詞の形で実動詞用法である。

次に「乞フ」の用法を見る。本書に「乞フ」は一例見られる。

(34) 世のかたためにておはしませば、いづれの民も、たゞ殿、御命乞ひをのみ申思へり。(巻第二十六 下二二二頁)

例(34)における「命乞ひ」は「長命を願う」意の動詞の連用形名詞法である。

次に、「求ム」の用法を見る。本書に「求ム」は一二例あり、そのうち実動詞用法が一〇例、熟語形式が二例見られる。

(35) 「よにうせじ。よう求めばありなんものを」とぞ宣はせける。

(巻第七 上二三四頁)

(36) 女院の御前には、世中をおほしめし歎きわびさせ給て、巖の中求めさせ給て、白河殿に渡らせ給ぬ。(巻第三十六 下四三六頁)

例(35) (36)における「求めば」「求めさせ」はいずれも「捜し求める」

意の実動詞用法である。

(37) 仰おほぎて見みれば、法性そとの空晴あはれねど、怖求おその霞かすみさす。

(巻第二十二 下一四九頁)

(38) 白業びやくの報うけなれば、求不得もとの苦くるしみもなし。(巻第十八 下八四頁)

例(37)における「怖求」は「極楽往生を願ねがい求めること」の意、例(38)における「求不得」は仏教用語で「求めて得られないこと」の意であり、いずれも音読される熟語形式の実動詞用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「バヤ」「ガナ」「ナン」の用法

まず、「ホシ」の用法を見る。本書に形容詞「ホシ」は二例あり、そのうち一例は終止形で、一例は「ぞ+ほしき」という係り結び形式で用いられている。

(39) この君達みをいかにほしと思おもふ人多おほからんとすらんな。

(巻第八 上二八九頁)

例(39)は「ほし」の終止形で用いられ、「この姫君達を、これからどのようにして欲しいと思う人が多おほくなることだろうな。」の意と解され、これは「願望」を「説明」する用法である。

(40) ながめつ、見みまくぞほしき住すみの江えの松まつもむべこそ年としの經へにけれ

(巻第三十一 下三五五頁)

例(40)は和歌における用例であり、「まく・ほし」は次に考察する助動詞「まほし」の古形である。「見まくぞほしき」は「見てみたい」の意と解され、これは「願望」を「表出」する用法である。

次に、「マホシ」の用法を見る。本書に「マホシ」は七六例あり、そのうち地の文に六一例、会話文に九例、和歌に六例見られ、和歌における例の五例が続編にある。また、全用例のうち慣用的な「あらまほし」が二七例見られる。

(41) 内大殿うちだいだんに譲ゆづり奉たてまつらまほしくおほしけめど、宇治關白殿うぢせきはくだんの譲たてまつ奉たてまつらせ給たまし御心ごこころをおほしめせば、いかでかは。(巻第三十九 下五一七頁)

(42) 内うちには、いかにくくと日ひ、に見み奉たてまつらまほしう思おもほしたれど、日ついでなど選えらせ給たまひて、日頃ひごろはたゞ過すぎに過すぎもていぬ。(巻第七 上二二八頁)

(43) 世人よじんも奏あそせまほしき事はなきやうなければ、参まゐり集あつまり、ことなる御覺おぼなり。(巻第三十八 下四九二頁)

(44) 若わかき人ひとく押おし凝こりたる御几帳ごきじょうの際きばなど、繪ゑにか、まほし。(巻第十一 上三五四頁)

例(41)～(44)は地の文における用例である。例(41)～(42)は連用形で「お譲りしたく思う」「日毎にお見舞い申し上げたく思うが」の意、例(43)は連体形で「奏上したい事は」の意、例(44)は終止形で「絵に描きたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(45) 「さおはすらん。兒ながらもいみじう見まほしかりし御有様ぞや。さても御丈いくらばかり」との給へば、(巻第二十六 下三二頁)

(46) 「人の子にて見んに、羨しくも持たらまほしかるべき子なりや。みめ・容貌・心ばせ・身の才いかでありけん」と、
(巻第二十七 下二五七頁)

例(45)(46)は会話文における用例である。「見たかったご様子である。」「持ちたいに違いない子である。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(47) とくれども沫にもあらぬ瀧の絲を常に撻りても見まほしきかな
(巻第三十二 下三七二頁)

(48) あふ事はたなばたつめにかしつれど渡らまほしき鵲の橋
(巻第三十四 下四一三頁)

例(47)(48)は和歌における用例である。「あなたのそばへ行ってお会いたい。」「鵲の橋を渡って逢いたい。」の意と解され、「願望」を直接「表出」する用法である。

(49) 「あらまほしうめでたうおぼし掙てさせ給へる御心かな」とかたじけなくおぼされて、物忌もえさせ給はずなりにけり。
(巻第十九 下二〇七頁)

(50) この年頃は、よろづうちとけ、心をかしうあらまほしかりつる御仲らひを、候ひつる女房まで戀ひきこえさせぬなし。
(巻第二十六 下二二二頁)

例(49)(50)は「理想的なお取り扱い」「理想的であった間柄」の意と解される。「あらまほし」はもともと「あり」の未然形に「まほし」が接続し、そうであってほしいところから、理想的だという意味になり、これは一種の慣用的用法といえる。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に「バヤ」は四一例あり、そのうち地の文に一例、会話文に一二例、心話文に一六例、和歌に一二例見られる。

(51) 中宮の若みや五十日うち過ぎて、いみじくつくしうおはしますを、候ふ人く、これを抱き奉らばやと思べし。
(巻第二十八 下二八二頁)

例(51)は地の文に用いられる用例である。「人々はお抱き上げたいと思うだろう。」の意と解され、第三者の「願望」を「説明」する用法である。

(52) 「かれを見ばやな。御子達は御対面とて五や七などにてぞ昔は有ける。又内に兒など入る、ことなかりけり。」(巻第五 上一八一頁)

(53) 「念佛などを聞かばや」と宣はすれど、たゞ今は同じ定に、平かに在しますべき御祈のみぞある。(巻第九 上三〇四頁)

(54) 「この御様を繪にか、ばや」と、あはれに見えさせ給ふ。
(巻第十三 上四〇二頁)

(55) さる山の邊りにては、光るやうに見え給に、「あないみじ。これを人に見せばや」と、(巻第二十七 下二五七頁)

例(52) (53) は会話文に、例(54) (55) は心話文に用いられる用例であり、「かれに会いたい。」「念仏を聞きたい。」「絵に描きたい。」「他人に見せたい。」「の意と解され、いずれも文末の言い切りの形で「願望」を「表出」する用法である。

(56) 「あなうつくし。これを抱き奉らばやと思へど、泣きやせさせ給はんと、わづらはしくて」と宣はすれば、(巻第十一 上三五六頁)

例(56) も会話文における用例であるが、言い切りの形でなく、「姫宮をお抱きしたいと思うが、」の意と解され、これは「願望」を「説明」する用法である。

(57) 咲き咲かずおほつかなしや櫻花ほかの見たらんに問は

(巻第十四 上四二二頁)

(58) 古もかばかり澄める秋の夜は見きやと人に問は

(巻第十九 下一一五頁)

例(57) (58) は和歌における用例であり、「見ただろう人にたずねたい。」「見ましたかと人に聞きたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ガナ」の用法を見る。本書に「ガナ」は一六例あり、そのうち「ヲガナ」は一例、「モガナ」は八例、「テシガナ」は六例、「ニシガナ」は一例見られる。

(59) 若宮の御乳母の候ふはさる物にて、やむ事なからん人をがなとおほしめして召し出づ。(巻第三十八 下四九四頁)

例(59) は地の文における「ヲガナ」の用例である。「身分の尊いものがいてほしいと思つて、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(60) 今年ことしは御禊・大嘗會ととぐゑなどのあるべき年としなれば、今年ことしともかくもおはしまさずもがなとおほしけり。(巻第十一 上三七七頁)

(61) 昔賀陽親王といひし人こそ、細工さいくはいみじかりけれ。それもがなといひいでにけり。(巻第十九 下一〇九頁)

例(60) は心話文、例(61) は会話文における「モガナ」の用例である。「今年ことしは万が一の事がないようにありたい。」「そのような細工物が欲しい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(62) 露ばかりあはれを知らん人もがなおほつかなさをさてもいかにと

(巻第十 上三二八頁)

(63) ありながら別れむよりはなかくわかになくなりたるこの身ともがな(巻第二十七 下二五二頁)

例(62) (63) は和歌における「モガナ」の用例である。「少しでも物のあわれをわかまえた人がいて欲しい。」「すでに死んでしまった身でありたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(64) 「いかで家地もまからで、今夜のうちに身を失ふわざをしてしがな」(巻第五 上 一六五頁)

例(64)は会話文における「テシガナ」の用例である。「今夜なんとかして身を隠すことをしたいものだ。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(65) 別れにし人に代へても見てしかな程経てかへる玉もありけり
(巻第十六 下五七頁)

(66) 風吹けど枝も鳴さぬ君が世に花の常盤ははじめてしがな
(巻第三十六 下四三五頁)

例(65) (66) は和歌における「テシガナ」の用例である。「死別した娘ととり替えて見たいものだ。」「常磐に散らぬ花の例を開きたいものよ。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(67) 猶いかで疾う下りて心やすきふるまひにてもありにしがなとの
みおぼしめしながら、(巻第一 上四〇頁)

例(67)は心話文における「ニシガナ」の用例である。「何とか早く譲位して、気楽な振舞をしたいものだ。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ナン」の用法を見る。本書に「ナン」は一九例あり、そのうち会話文に四例、心話文に三例、和歌に一二例見られる。

(68) 「はや歸らせ給なん。夜さりの御渡り夜更け侍なん」と、いたうそ、のかしきこえ給へば、(巻第七 上二三〇頁)

(69) 「いかで疾く本意遂げなん」と宣はするを、
(巻第十五 上四四一頁)

例(68) (69) は会話文における用例である。「早くお帰りになってほしい。」「速く本意を遂げてほしい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

(70) 「いつしかうらくとならなむ」と誰も待ち思ふ程も、あながちに
生きたらん身の程も知らぬ様に、あはれなり。
(巻第八 上二四九頁)

例(70)は心話文における用例であり、「早く麗かな春になってほしい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

(71) 年を経てゆきあふ坂の驗ありて千年の影をせきもとめなん
(巻第七 上二二三頁)

(72) 残なくなりぬる春に散りぬべき花ばかりをばねたまざらん
(巻第三十一 下三四八頁)

例(71) (72) は和歌における用例である。「千年もまします御姿を塞きとめてほしい。」「花を吹く風もねたまずに散らさないでほしい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

四、おわりに

以上、栄花物語における希望表現の構成と用法を考察してきた。その希望表現の構成形式の種類を見ると、和文体の助動詞「マホシ」と終助

詞「バヤ」「ガナ」「ナン」が多く用いられているのが特徴である。これは栄花物語の文体に由来する現象である。

各構成形式の用法についていえば、「欲」と「願」の名詞用法は仏教用語として仏教的内容に現れ、「欲」より「願」の用例数が多い。その助動詞用法は慣用形式「〜ント思フ」「願クハ〜」と対応する。「願クハ〜」は漢文の読み下し文にのみ見られるが、「〜ント思フ」は文体に関係なく用いられる。動詞「望ム」「祈ル」「求ム」の用例数こそ多数見られるがその用法は単純であり、「請フ」「乞フ」の用例数が非常に少ない。

和文系の「マホシ」「バヤ」「ガナ」は「願望」を、「ナン」は「希求」を「表出」または「説明」する。「マホシ」は地の文に多く用いられ、「願望」を「説明」する用例が多い。「バヤ」「ガナ」は会話文・心話文、和歌に多く用いられ、「願望」を「表出」する用例が多い。「ナン」は和歌に用いられる例が最も多く、すべて「希求」を「表出」する用法である。

要するに、和文に多く見られる助動詞と終助詞が希望表現の中心であることが栄花物語における希望表現の特徴と言えよう。

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関し、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「二人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほ

しいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大事典』第一巻 一九八三年一〇月第一刷発行 岩波書店

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(7) 注(2) 参照。

(しばたしろうじ
れんちゅうゆう
香川大学名誉教授
広島市立大学客員研究員)

(二〇二〇年五月二十九日受理)